

(要約版)

中国江南における喫茶文化の社会人類学的研究

助成研究者 川瀬由高 (首都大学東京大学院・博士後期課程)

1. 目的

本研究は、江南地帯における「茶館 chaguan」の社会的意義とその変遷を、文献調査および実地調査を通して明らかにすることで、中国人の「三大嗜好品」の一つともされるお茶が、庶民生活においていかなる意義を有するものであるのか、社会人類学的な観点から描き出すことを目的としたものである。

庶民生活と喫茶文化というテーマを考える上で、茶館は格好の素材である。なぜなら、中国の伝統的な喫茶店だと言える茶館は、「単なる休憩、社交の場をこえて、取引、集会、仲裁の場として使われるなど庶民の社会生活にとってなくてはならぬもの」[西澤 1995: 131]とされてきたからである。だがこれまでのところ、中国茶研究の研究蓄積に比して、茶館に焦点をあてた研究は相対的に不足しており、特に社会人類学の立場からの議論は僅かしかなかった。

また、良質の緑茶を生産することで知られる江南地帯は、中国全体で見ても有数の茶の生産地であり、その地理的背景から、常飲されるお茶の違いなど、喫茶文化の「地方性」は先行研究でも示唆されていたものではあった。しかしながら、茶館に関する実証研究は始まったばかりであり、とりわけ、茶館の歴史的役割と今日の位相を繋ぐ研究はこれまでなされてこなかった。

以上のような研究状況を鑑み、本研究は、「庶民にとっての茶館」という観点から、解放前の茶館について断片的に残された史資料および先行研究を総合的に検討すると共に、2011年夏に行ったフィールドワークの資料を基に、茶館の社会的意義の変遷について素描する。この作業を通して、中国の「喫茶文化」の一側面を描き出すことを試みる。

2. 方法

上記の目的のため、本研究では、以下の二つの研究方法を用いた。

(1) 文献研究

中国における茶館の変遷について把握するために、先行研究や史資料を可能な限り収集し分析した。なお、日本では入手が困難な資料は、2011年7月24日から同年8月14日までの、約3週間の実地調査の際に、南京市内、江蘇省丹陽市、浙江省杭州市の書籍店、博物館、および大学図書館において収集したものである。

(2) 実地調査

文献資料の収集と並行して、江南地方の茶館にて実地調査を行った。まず、インターネットや雑誌などをもとに、南京市内における「茶館」の分布状況や店舗数などに関する量的調査を

行った。その上で、リストアップした中から十数店舗をピックアップし聞き取り調査を行った。なお、補足的な調査資料の収集を行うため、浙江省杭州市においては、茶館に限らず、茶産業の生産店・販売店において聞き取り調査を行ない、また、江蘇省丹陽市においては、茶館の目視調査を行った。

3. 結果

江南地方における 1949 年以前の茶館像を具体的に明らかにするため、江蘇省の茶館に焦点を絞り先行研究および史資料を検討した。分析の際には、農村部、都市部、大都市部という 3 つの地理的条件に留意しながら、「伝統的茶館モデル」、即ち、地域社会において重要な社会的役割を担っていた場としての茶館というモデルを提示した。

また、フィールドワークの結果から、現在の南京市における茶館は約 500 店舗あり頻繁に出店・閉店が起こっていること、茶館の形態として 5 類型が挙げられることを指摘した。そして、南京市における現代式茶館は、1980 年代-2000 年代において議論されてきた伝統復興型のもの、および伝統創造型のもののいずれでもないことを明らかにしたうえで、各類型の具体的な様相について詳述した。

さらに、「伝統的茶館モデル」との比較を行うことで、現代の南京市における茶館からは、伝統的茶館が果たしてきた諸機能、とりわけ、地域社会における裁判所や職業斡旋所、商品売買の取引所といった機能が消失していることを明らかにした。茶館の利用形態や経営形態の多様化という趨勢を鑑みると、共同体論で言うところの、地域社会の役割の低下とコミュニティからの個人の離床というプロセスが、茶館においても見られ、茶館はコミュニティよりもアソシエーションに対し、憩いの場を提供していると論じた。

4. 考察

本稿が紹介したのは、「カフェ化」した茶館の興隆である。一見すると、南京市においては「茶館らしさ」は見られなくなったとも思える。だが、中国においてもスターバックスや一般的な喫茶店は既に多数存在する中、カフェ型茶館、麻雀設備付き茶館が 2000 年代後半より興隆してきていることは、中国における茶館の意味を考察する上で重要である。1930 - 2000 年代の茶館、および、2010 年代の茶館の「娯楽提供の機能」を俯瞰的にみても、娯楽（トランプ、麻雀、世間話）、縁談、商談等のための場の提供、「瓜子」やお茶、軽食の提供、相声の上演等の機能が、後者の茶館においても確認できた。強固な連続性を示す、茶館類（‘茶館’、‘茶社’、‘茶庄’、‘茶楼’）の施設に冠された「茶」という名前は、茶館の実態の変容にも拘らず、経営側および顧客側の双方にとり、これらの理念を想起させる指標となっている。

現代の南京市の茶館では、実際には必ずしもお茶が飲まれるわけではない。だが、庶民の間では「お茶を飲み、おしゃべりをする場所」という意識が茶館という名称と共に定着しており、この理念こそが茶館の現在を説明するものだと言える。時代の変化とともに社会的役割を変容させながらも、茶館は、「三大嗜好品」と共に庶民の憩いの場を提供しつづけている。